

拝啓 今年も早や6月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、今はねむの木の花が咲いております。

今回は、小西芳之助先生の『コリント人への第二の手紙講解説教』からの引用の11回目、最終回となりますが、今回の「エンカウンター」の11ページ、「パウロは永遠不滅の宝を直接神から示された」という項目には、次のようにあります。

「パウロは永遠不滅の宝を直接神から示された

パウロは自分を誇ることが嫌いでしたけれども、パウロを使徒ではないとコリントの学者が疑ったものですから、弁明するために、自分も誇ろうと言って、パウロは過去を語りました。パウロが自分の生涯の苦しみを書いたのは、この箇所だけあります。この窓から見れば、パウロが如何に福音の伝道のために苦勞したかがわかります。苦勞した自分の自慢話の中に、自分が啓示を受けたことを述べています。君達は、私を使徒でないと言うが、こういう特別な啓示、黙示を受けたのだと言いました。使徒行伝では、パウロが5回啓示を受けたとありますが、この特別な啓示については触れておりません。私は、これは、パウロが福音の真理を神から直接示されたためであろうと想像します。この啓示はパウロを一生支配し、彼を励ましたのみならず、キリスト教2000年を支配した啓示であると私は確信します。なぜなら、この啓示は、人間からではなく、直接神から聞いた、とパウロは言っております。このようなことを言った人は、パウロだけあります。また、自分は地上に生きているよりも、天国に行ってキリストと共にある方が好きである（prefer）と言いました。どちらかといえばそっちを取ると。実に、パウロという人は不思議な人です。永遠不滅の宝を直接神から示されたのではなかろうか、と私は思います。この点については、天国でパウロ先生に聞いてみたいと思っています。

パウロは、復活されたイエスより直接真理を示された。これは他の人にはない経験でした。この経験により、キリスト教は、生まれたと思う。」

「コリント第2の手紙講解説教」からの引用紹介は、本号をもって終わりになります。次号からは、「ガラテヤ書講解説教」から引用を致すことにいたします。（先月号にも、誤って同じことを書きました。）

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

**小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』6月18日**

「私の先生

パウロは、『わたしは、それを（福音を）人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである』と言った（ガラテヤ書1章12節）しかし、私は、福音をイエス・キリストと父なる神から、内村鑑三先生を通して受けた。大正10年に先生が、ロマ書3章21-26節を説教なさるのを聞いた時であった。もし私が、内村先生から福音を聞かなかつたら、福音を信じなかつたであろう。

「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ロ

マ書 10 章 17 節) は、まことに真実である。神は人を用いたまう。」

#### 新渡戸稲造先生『一日一言』6月9日

「今日は曇る今日は雨降ると、不平を並べ立てても空は晴れぬ。雨が降るなら、傘1本でわが行動は定まる。事に当たり、くよくよ呟きて、我が望みの叶うものなら、人生はねばけ奴の現に過ぎぬ。事を決するは断行である。断じて行えば鬼神も避く。」

#### 松下幸之助先生『道をひらく』「志を立てよう」

「志を立てよう。本気になって、真剣に志を立てよう。生命を賭けるほどの思いで志を立てよう。志を立てれば、事はもはや半ばは達せられたと言ってよい。

志を立てるのに、老いも若きもない。そして志あるところ、老いも若きも道は必ずひらけるのである。……

志を立てよう。自分のためにも、他人のためにも、そしておたがいの国、日本のためにも」

#### 内村鑑三先生『続一日一生』4月22日

「クリスチャンはキリストである。キリストの信者ではない。彼の弟子ではない。彼のしもべではない。キリストご自身である。自己は死して、キリストが代わって生きたもう者である。ゆえに、クリスチャンは凡ての点においてキリストのごとき者である。彼の如く、上より生まれ、彼の如く、神に導かれ、彼の如く、世に憎まれ、彼の如く、十字架を担い、彼の如く死して、彼の如く召天する者である。4福音書にしるしてあるキリストの一代記は、写してもってクリスチャンの一代記となすことができる。

クリスチャンが神の子であるのは、キリストが神の子だからである。クリスチャンがよみがえるは、キリストがよみがえりたもうたからである。クリスチャンに永生が有るは、キリストにそれが有るからである。キリストにある者はすべてクリスチャンに有る。キリストにありまたあったもので、クリスチャンに無いものはない。」

#### パークレー先生「ウィリアム・パークレイの一日一章」(5月25日)

「形づくる

役に立つ用の己を形づくれ、

壁の穴に合う石は道に捨てられはせぬ、

やがて運命がなんじの丈を測り、いうであろう、

なんじは使い物になる、

わがためにこれをなせ。

この世には我々一人ひとりにぴったり合った場所がある。神の計画と目的のためにわれわれ一人ひとりがなすべき仕事がある。

人生は始めから終わりまでわれわれを形成しようとしている。まず両親がわれわれを形成する。教師が形成する。だが、何よりも人生経験が我々を形成する。人生経験はそのためにあるのである。

「神は万事を益となるようにして下さる」とパウロは言った（ローマ8・28）災難と思われるようなことですらも、我々のためになるようにできているのである。

人が形成されることを拒むのは、人生の悲劇である。」

### カウマン先生『山頂を目指して』5月23日

「永遠の問題は、断片的な時間にかかっている。『夏に集める者は賢明である』ということわざがある。青年は、たとえて言えば夏である。それは知識を集める時である。習慣を形成し、人格をつくり上げる時である。機会を活用する青年、勤勉に『冬のために夏に集める青年』は、のちに責任ある地位についたときそれに対する準備が出来ており、立派に成し遂げることができるのである。

高潔な人生とは

突然に得られた栄光のきらめきではない。

高潔な人生とは、

力強いわざのなされた一日一日の集積だ。

私たちはみな、なんらかの暇な時間を持っている。差し迫ってしなければならないことに注意を向ける必要の無い10分、20分、1時間の時を持っている。そのような時間は青年時代には最も多いのである。その時間をどのように用いるだろうか。目的なしに空費してはならない！時は、そのように空費するにはあまりに貴重である。」

5月20日、私の息子3人がどこか山へ一緒に行つてあげると言うことで、毎年正月に登っている山中湖奥の石割山(1413m)に4人で登山して来ました。この日は、曇りで富士山は見えませんでした。石割神社の3回周りの願掛けなどもして、楽しい登山でした。下山後は、紅富士の湯で温泉に入り、汗を流しました。

新型コロナは、第5類という扱いになりましたが、最近の電車の中とかスーパーでは、まだマスクをされている人が多いようです。しばらくは、マスク、手洗い、うがいなどはこれまで同様実行されて、十分ご注意下さるようお祈り申し上げます。

6月22日

山口周三

エンカウンター読者の各位